

青森県

現役医系技官の声
15

健康で長生きな青森県をめざして

本州最北端の青森県は、日本海・津軽海峡・太平洋と三方を海に囲まれ、世界自然遺産の白神山地があるなど、豊かな自然にめぐまれ、鮮やかに変化する四季を楽しむことができます。またりんごをはじめとする名産品も多く、多彩な食も自慢です。その一方で県民の健康についてはさまざまな課題があり、平均寿命は年々伸びてはいるとはいえ、残念ながら男女とも全国最下位が続

いています。ただ、何とかしなければならぬという意識も県民に浸透しており、“短命県返上”という言葉が子どもの口の端にも上るほどです。県でも「今を変えれば！未来は変わる！！」のスローガンのもと、県民の健やか力(=ヘルスリテラシー)を上げ、全国との健康格差縮小を達成するための各種取組を推進しています。



知事(写真中央)、青森県健やか力向上推進キャラクター“マモルさん”と共に、健康に関する普及啓発の寸劇を行う筆者(写真右)

青森県健康福祉部長
有賀 玲子

ARUGA Reiko

平成19年入省。大臣官房厚生科学課、保険局医療課、岐阜県健康福祉部保健医療課、健康局健康課等を経て、平成30年より青森県健康福祉部次長。平成31年4月より現職。厚生科学課在任時に平成21年の新型インフルエンザ対応、健康課在任時に熊本地震対応等を経験。

今までの業務や体験

2009年の新型インフルエンザ発生の際には、主として広報・メディア対応に携わりました。感染者に対する差別や誹謗中傷を目の当たりにして、感染症拡大防止のための情報公開のあり方について考えさせられました。その時の経験が現在の新型コロナウイルス感染症対策のベースになっています。

下関市

現役医系技官の声
16

基礎自治体の視点で 保健医療行政を俯瞰する

本州の最西端に位置し、三方を海で囲まれた自然豊かな下関市は、源平壇ノ浦の合戦、武蔵と小次郎の巖流島の決闘など、多くの歴史が刻まれた魅力あふれるまちですが、全国の地方都市と同様に、高齢化・人口減少への対応が待たなしの状況です。医療従事者も高齢化が進行しており、過重労働を強いられる勤務医の悲鳴の声を間近で聞きながら、持続可能な医療の確保のため、保健医療担当部長として地域医療構想の実現を目指して関係者と膝詰めの議論を行っています。

また、保健所長としては、昨今のCOVID-19対策の地域の責任者として、正

解の示されないなかで、職員や地域の医療関係者と連日協議しながら地域ならではの答(施策)を模索し続ける毎日です。

今までの業務や体験

基礎自治体で保健医療行政を経験させて頂くなかで、国が作成したフレームワークの多くは、地域の実情を加味した自治体の施策として落としこまれた時点で、初めて市民に影響を与える実体のある施策となることを再認識しました。基礎自治体の視点で施策を生み出せる行政官として貢献していきたいと考えています。



下関市保健部長/
下関市立下関保健所長

九十九 悠太

TSUKUMO Yuta

平成28年入省。大臣官房厚生科学課で省内研究事業のとりまとめやゲノム関連施策を担当。その後、社会・援護局障害保健福祉部精神・障害保健課、企画課で精神保健医療福祉や身体障害者手帳制度などを担当し、令和元年より現職。